

# 読書のユニバーサルデザインを実現するための 活動紹介

成松一郎(読書工房代表、専修大学・川村学園女子大学講師)

「読めない」「読みにくい」あるいは「わからない」「わかりにくい」というバリアにぶつかっている立場の読者ができるだけストレスなく読書できる環境(=読書のユニバーサルデザイン)を実現するための活動を紹介します。

具体的には、読書工房という出版社で関連書籍を出版するとともに、大学の講義や、出版UD研究会などを通して、さまざまな読者の特性やニーズを知るとともに、できるだけ当事者と一緒にバリアフリーやアクセシビリティのアイデアについて「考える」機会をつくっている。

## 1. 大学における「読者の多様性」を知る授業

現在、専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科において「情報弱者支援論」という講義を担当している。また、同じく専修大学と川村学園女子大学の図書館司書課程の「図書館サービス特論」「図書館情報資源特論」などの講義を担当している。

いずれの講義においても、以下のようなことに到達目標を置いている。

- ・さまざまな立場にある読者(利用者)の特性やニーズについて、基本的な知識を習得することができる。
- ・出版や図書館のサービスをより多くの人に届けるために、どんな取り組みが必要なのか考えることができる。

## 2. 読者の特性やニーズを知る

### 2.1. 「読める」を求める読者

例:全盲の読者にとって、紙に印刷されている本はまったく読むことができない。

→聴覚や触覚を活用した読書の方法が考えられる。



写真1 大学の講義では積極的に障害当事者のゲスト講師を招いている。全盲の図書館員である松井進さんが、点字ディスプレイを使って文章を読みながら講義をしている場面。

## 2.2. 「読みやすさ」を求める読者

例: ロービジョン(弱視)の読者にとって、一般の本のレイアウトでは読みにくさを感じる人が多い。

→大きな文字の本など読みやすいメディアの活用。あるいは、拡大鏡(ルーペ)や拡大読書器を活用する読書の方法が考えられる。



写真2 同じく大学の講義の中で、ロービジョン当事者の森田茂樹さんが拡大読書器の使い方について説明している場面。長時間拡大読書器を使って、疲れずに読書するためには、目的にあった機種を選び、正しい使い方を知ることが必要。

## 2.3. 「母語による読書」を求める読者

例: ネイティブ・サイナー(聴覚に障害があり、小さい時から手話を使っている人)にとって、一般の本の内容を理解するのに困難さを感じる人がいる。

→手話 DVD の活用。あるいはマンガなど視覚を活用したメディアへのニーズが高い。

## 2.4. 「わかりやすさ」を求める読者

例: 知的に障害がある読者にとって、一般の本の内容を理解するのに困難さを感じる人がいる。

→「わかりやすい本(LL ブック)」の活用。あるいはマンガなど視覚を活用したメディアへのニーズが高い。

## 2.5. 「マイノリティ(タニマー)としての情報を求める読者

例: 難病患者である読者にとって、必要な情報が入手しづらく、制度の谷間に陥りやすい人(タニマーと呼ばれる)がいる。あるいは、「見えない障害(特性)」のため、周囲の人から理解されにくい。

→闘病記(ブログを含む)や患者会情報などの活用。自分の立場や困っていることを理解してもらうための本や情報を紹介していく。

## 参考文献

[1] 読書工房ウェブサイト <http://www.d-kobo.jp/>

[2] 出版 UD 研究会ウェブサイト <http://www.ud-pub.org/>